

令和2年度第1回 京都市次代の左京まちづくり会議 摘録

【日時】 令和2年9月18日（金） 午後3時から5時まで

【場所】 左京総合庁舎1階 大会議室C

【出席者】 ○委員 13名《欠席者5名》

○左京区役所 13名

【内容】

1 開会

2 内容

（1）左京区基本計画（第3期）骨子案について

- ・ 事務局から説明（資料①）
- ・ 意見交換

■左京北部山間地域の現状と課題、方向性について

＜委員＞ 65歳以上の高齢者が多く、若い人、特に高校生が非常に少ないことが課題であり、5地域全体の高齢者率は63%と高い。定住化については、道路改良と交通手段の確保を考えなければならない。コロナ禍の中ではあるが、自然を活かした魅力ある里山づくりを行うため、この9月に、一般社団法人花背ブランディングラボを立ち上げ、北部山間地域の活性化を図ろうとしている。

＜委員＞ 過疎地域の問題は、コロナ問題の前後で変化した。コロナ問題以前は、現実を見ずに人口を回復しようとしていた。しかし、今後の日本は、年間50万人ずつ減少することを避けようがない。国は交流人口や外国人を増やすことで地域振興を図り、京都市も観光客の分散化による滞在戦略をとってきた。しかし、コロナ問題の影響でインバウンドは急減しており、基本計画の中でどう対応すべきかを考える必要がある。

＜委員＞ 左京区の山間地域と中心部の交流を促進するため、以前から子どもたちの文化芸術活動を実施してきた。現在はコロナ問題の影響で難しいが、将来的には進めていきたい。

■まちづくりの基本姿勢・要素について

【「誰一人取り残さない」理念とIT化】

＜委員＞ ウィズコロナ時代でIT化が進む一方、取り残される人が多いのではないかと感じている。子どもや若い人は適応できるが、高齢者へのフォローが求められる。また、対面で直接交流する豊かさも見直す必要がある。

＜委員＞ 市民のデジタル化をどう進めていくのかは大きな課題である。市内の各所にWi-Fi環境が整備され、キャッシュレスも進んでいる。高齢者も含めて誰でも交流でき、取り残される人がいない社会にしなければならない。特に文化は、デジタル化で接する機会が増えるはずだ。三密を避ける意味もあるが、京都は最先端を走り、新しい文化をつくってほしい。

＜委員＞ 学区が広く世帯数も多いため、現在、若い自治会役員が区役所と連携して、配布物などのIT化を進めている。ただ、直接話す機会が減ったとしても、横のつながりは守らなければならない。高齢者は書かれたものが配布されるのを待っている。

- <委員> IT化は本来、高齢者に一番メリットがある。IT化を実現する中で、セキュリティや使い方など難しい問題はあるが、次の5年間でどのように高齢者を包括するのかを考えなければならない。
- <委員> 個人的な経験では、ITへの入り口としてSkypeは良いと思う。孫の顔を見ながら毎日話ができれば、LINEも使いたくなるかもしれない。
- <委員> 私自身もZOOMを使って実家にいる母親と話しているが、まだあまり理解していないようで、今もスマホの使い方を教えている。

【左京愛】

- <委員> 「左京愛」についての書き方が足りない。「左京ファン」を拡大するためには、町家等に住んでいる方も、京都の常識を知らない方に対して、上手に伝えていく必要がある。昨年開催された国連世界観光機関（UNWTO）の会議では、「RESPECT」をテーマにしたDVDが放映されたが、観光客が現地文化をリスペクトし、それを持ち帰るところまでを想定した内容だった。
- <委員> 五山の送り火については、年に数回、いたずらが発生する。今年8月の事件後には大文字山を閉鎖する話も出たが、それには皆が反対した。
また、環境や自然を守るための人手がまったく足りない。今は学生ボランティアの力を借りて守っている。
- <委員> 左京区の文化の担い手は多く、質も深いと感じた。大文字山の話に関しては、観光資源という面もあるが、事件後も山を閉鎖したくないと思われており、区民の文化に対する思いは非常に強い。左京区の文化をつくってきたのは祈りであると感じた。基本計画の中で「コロナ問題があっても、文化を育むことは祈りである」というような展開はできないか。
- <委員> 五山の送り火は亡き人を偲ぶ宗教行事であり、市長も京都は宗教都市であるため大文字山へ登る人を止められないと言われていた。
- <委員> 舞台芸術活動はコロナ問題で非常に大きな影響を受けた。お客様が劇場に来られなくなった時に、インターネットで配信した。今までは近場の人にしか来てもらえなかったが、配信では遠く離れた人とつながることができ、我々の活動を国内外の人に知ってもらい、広範囲の方から寄付を得ることもできた。
このことは左京ファンの拡大にも関連する。ついお客様に見に来てほしいと考えがちだが、何らかの形でファンになってもらうことが重要だ。ファン心理として、この劇場が好きということに限らず、文化芸術を支援したいという動機もある。
交流人口促進の考え方についても、すぐに観光や移住に結び付けたいと考えてしまうが、まずはファンになってもらうだけでも良いと思う。国全体の人口が減っている中で、地域同士で関係人口を取り合う発想は良くない。
- <委員> 劇団が行政のまちづくり活動に積極的に参加することは、全国的に見てもまだ珍しいが、社会的に大きな影響を与えている劇団もあり、そういう可能性をもっと生み出せば良い。

【つながり・共生】

- <委員> 宗教的な部分はとても大切だが、一方で宗教色を拒否する人は多く、「心の教育は必要ない」、「道徳教育は反対」など、アレルギーを持って

いる人もいる。しかし、人間は一人で生きることができず、助け合いが必要だ。現代はこの助け合いが見えにくくなっていて、まるで一人でも生きられるように思えてしまうことも多いが、本当は自分一人だけで生きていける訳ではないということ子どもたちにも知ってほしい。人間同士、そして自然とも共存し助け合うことを基本理念としたい。また、この計画の基本的な考え方がどのように私たちの日常生活に繋がっているのかもわかりやすく示すことができればよいと思う。

<委員> 「共生」については、外国籍を持った人を含め、多様な人と共生できているか。お互いを認め、寛容性のある社会を目指すことも一つの目標である。

<委員> コロナ問題の影響で、子育てや介護、日本在住の外国人等、支援から漏れてしまう人たちも対象として捉える必要があるが、寛容性と包摂性のきっかけとして芸術などを使うことで、対象者を「イン」（包摂）することができる。京都市は9月からセクシャルマイノリティの方を対象に「京都市パートナーシップ宣誓制度」を始めており、少しずつ柔軟な社会になることを期待している。

<委員> 山間地域の人口減少を食い止めるためには、担い手の育成や支え合うことが重要なポイントとなる。コロナウイルス感染症という予期せぬことが起こり、今までの常識では考えられないほど難しい対応を迫られているが、地域の方々の団結力が高まるという良い面もあった。

また、コロナ問題発生後、観光の形態が変わってきたように感じる。若い夫婦たちが大原や広河原に車で来て、川遊びやキャンプを楽しみ、お土産に地元の野菜を買ってくれるため、地元の人は喜んでいる。

<委員> 左京区のような魅力や文化をもっと知ってもらうことで、左京ファンになってもらいたい。

<委員> 私の団体では畑と食育活動を行っているが、8月頃から参加申込が殺到している。畑の活動では、地元の方に先生になっていただき漬物づくりを教わるなど、地域とのつながりのきっかけづくりになっている。

<委員> 地域の子どもや親と地元の人とのつながりができ、地元の大切さを理解してもらえる事業には、先見の明があった。

<委員> 新興住宅地では、子どもの安全や周りに対して無責任な親が多い。個別に何度も注意しているが聞いてくれない。コロナ問題の影響で、子どもと親の双方に話をする機会がないが、このような時は地域の集まりが非常に大事だと思う。

【なりわい】

<委員> 中小企業家同友会の会員は左京区に1700社程度あるが、会員の8割以上が緊急融資を活用し、大変な状況を乗り切ってきている。個人的にはリモートで仕事ができるようになったが、建築現場や旅行会社はできない。建築関係はコロナ問題の影響が大きく、顧客の要望も変わってきている。

地場企業はこれからどういう形で地域に貢献すべきかを勉強しているが、一緒に考えてほしい。地場企業がなくなると、防災環境や文化環境も全部変わってしまう。

<委員> 町家調査で、昔は町内の町家は町場大工が全部管理していることがわかった。左京区の場合、たくさんのハウスメーカーがあるが、地元のケアをしてくれる企業は必要だ。地域の建築関係の団体を含めて、昔の商店街振

興組合のように、もっと地域と緊密な関係をつくらなければならない。

<委員> 区民の方は地場にどのような企業があるかを知らないため、まずは知ってもらうことが大切であり、区民ふれあいまつりなどに出店して、企業のPRを行っている。

<委員> コロナ問題発生後、三密を避けて広々とした住まいやオフィスを求める考え方が定着してきており、建築事業者は必要とされている。今まで他に流れていた人たちをどのように地域に戻すのか、区民と接点を持つだけでなく、地域の接点がどのように役立つのかを伝える戦略が必要だ。

<委員> 三密を避けるのであれば、空き家を活用することも考えられる。Wi-Fi環境を整えれば仕事もできる。郊外に引っ越したいという声もある。

<委員> ただ、古い建物は水回りが昔のままで不便だ。改修にはかなりお金がかかる。定住化の促進を図るなら、市営住宅を整備してほしい。

【全体感】

<委員> 基本計画の骨子案は、コロナ問題以前に出来上がっていたが、改めて見直してみると、普遍的な要素がたくさん含まれていると感じた。コロナ問題が発生し、当たり前と思っていた価値が必ずしもそうではなく、情報技術はこれまで以上にその有用性を教えてくれたが、同時にその限界とフェイス・トゥ・フェイスの価値、交流やつながりの価値も教えてくれた。

高齢者に情報技術を使っていただくことは難しいが、これまで以上に世代間交流の接点を生み出すきっかけになるかもしれない。初めての方でも、やってみれば意外と簡単で面白いと、前向きに感じているところもある。

大学では、先生や学生もオンライン授業に慣れて定着している。しかし、7月に学生が大学に来る機会をつくったところ、直接交流ができる喜びが客観的に見ても伝わってきて、キャンパスが輝くことを実感した。上手く情報技術と付き合いながら、対面交流も大事にしなければならない。

この骨子案には、つながりや共生など、重要なキーワードが入っており、皆さんの意見が反映されている。また、「リスペクト」に関してもしっかり位置付けられており、皆さんの「より良いまちにしたい」という想いが形になっている。

(2) 平成31年度 左京運営方針の取組状況について（最終報告）

- ・ 事務局から説明（資料②説明）
- ・ 意見交換

<委員> 共汗型事業の左京・健康なまちづくりプロジェクトについて話したい。京都市ではアスリートの活躍の場として、子どものスポーツ活動の面倒を見ているが、午前中は高齢者向け指導、午後は部活動の指導ができればいいのではないかと。ただ、すでにこのような事業が展開されており、健康長寿と子育てを両方行っている。

<委員> あらゆるスポーツが学校スポーツ一本やりで、地域的なスポーツクラブがないため、様々な問題が起こっている。アスリートの力をセカンドキャリアとして活かしていただき、スポーツという競技だけでなく、健康を守るということまで発想を広げて、地域のスポーツ健康クラブのようなものをつくり、できれば後方支援を区にやってもらいたい。

<委員> 区役所の役割は一言では言えないが、市と自治組織との間に立って調整

を行っている。昔は地域で子どもたちを遊ばせていたが、今は貧富の差が広がり、親が個別にスポーツ教室に入れている家庭と入れられない家庭があって、地域で子どもを伸ばしてあげる場所がなくなった。誰一人取り残さないという観点からも、地域スポーツは大切な役割を持っている。

<委員> 外国であれば、公共空間にバスケットコートやミニサッカー場など、人と人がつながることができる場がある。もう少しスポーツが持つ可能性を広く捉えることで、メンタルヘルスやウェルネスにつながるのではないか。

<区職員> 左京区の素晴らしいところは、それぞれの立場で各団体が自主的に動いており、区と各団体との役割分担が出来上がってきたことだ。この会議の委員の皆さんの立ち位置もそれぞれ異なるが、共通項は必ず見つかる。そのようなことが左京区の良さを表している。区の人員が少なくなってくると、区は前に出ずに土台を支えるという役割が重要になる。課同士で連携して区民を支えていきたい。

(3) 令和2年度 区民提案・共汗型まちづくり支援事業（案）について

- ・ 事務局から説明（資料③説明）

<委員> 高齢者向けのオンライン研修はすでに始まっている。

3 その他

<区職員> 11月に次回の会議を開催する予定で、年度末にはパブリックコメントを実施し、その後、最終のまちづくり会議を開催する。計画の策定時期は来夏になる予定である。

4 閉会

以上